（第3種郵便物認可）

読売 俳壇

矢島 渚男 選

砂浜に書けなかったね夏の恋　東京都　関根ともみ

【評】砂浜に書きたかった人の名。しかし書けなかった。今年の夏も過ぎてゆく。原句には「ね」がなかった。一語を入れることで「夏の恋」に話しかける趣が生まれる。

鶏卵を小振りにしたる猛暑かな　川口市　高橋まさお

【評】鶏だって今年のような暑さは未経験で体調が悪かろう。食欲もない。卵が小振りになってしまう。餌代も高くなって値段が上がっている。庶民の食の味方に異変が起こった。

それぞれの思ひ老いゆく敗戦日　対馬市　神宮　斉之

【評】戦後も長くなって戦争の体験者も高齢化し思いも薄れがちだが、5席の小山さんは九十一歳である。

鋼鉄を溶かすがごとき炎昼ぞ　名古屋市　鈴木　雅彦

貨車で逃げた満州ジャガタラ花のころ　大阪市　小山　淑子

液状化寸前のチョコ猛暑来る　上尾市　清水　昇一

海の家水陸両用車椅子　神戸市　村上　幸子

カーテンを開けて寝ようか盆の月　砺波市　野村真里恵

なんとまあ腹の減る子よ夏休み　千歳市　鶴谷　雪子

いんげんの筋とる母と子の時間　宝塚市　武田　優子

宇多喜代子 選

新涼の嶺よりつづく戸口かな　市川市　高野　厚夫

【評】はるかに山が見える。自宅の戸口を出るたびに目に入る見慣れた山だ。新涼のころともなれば、ことに親しく思われる。

初七日の西日の部屋に母と在り　志木市　谷村　康志

【評】亡くなったのは作者の父だろう。初七日の法要を終え、母とともに一息ついているところ。なにかと多忙であった一日が終わった夕方の感慨である。

さやかなる笛の音すする村芝居　秋田市　小林しゅん

【評】村人のあの人この人が活躍する村芝居。本物の役者の演じる芝居以上に面白い。今回の出し物には笛が重要な役を担っている。

でこぼこの薬缶で煮出す麦茶かな　新潟市　若林れい子

枕頭に積む文庫本秋暑し　海老名市　山田　山人

金魚鉢すれすれに来て何か言ふ　神奈川県　石原美枝子

小走りに踏切を抜け盆の僧　東村山市　柏谷　静二

繕ひて洗ひて野良着草刈女　鹿島市　平山ちはる

追憶の五円でありし心太　大阪市　今井　文雄

終戦日女ばかりの句会かな　東京都　斎木百合子

正木ゆう子 選

広島の蟻が記憶を語り継ぐ　上尾市　中野　博夫

【評】原爆投下の後、人が立ち上がり、町が復興する陰で、自然の生態系もまた自らの生命力で復活したことに、あらためて思いを致す。物言わぬ蟻にも復活の物語があったはず。

涼しきはベンチの中の記録女子　栃木県　あらゐひとし

【評】言葉足らずの感はあるが、この時期だと、高校野球のベンチであり記録係のこととわかる。汗まみれの選手や応援団とは対照的な係だ。

今朝の秋やうやう馴染むヘルメット　枚方市　定井　節子

【評】こちらも、今年の句であれば、おそらく自転車用だろう。ヘルメットに縁の無かった人が、被っているのだ。わが家でもただいま物色中。

番号で示す古墳や蟬の殻　東京都　野上　卓

覚悟して猛暑に暮らす老夫婦　日高市　田辺　英男

酢昆布の味の納涼映画祭　川崎市　多田　敬

矛先を向ける当てなき猛暑かな　越谷市　安居院半樹

打ち水の風情かき消す炎暑かな　久喜市　野口　正夫

ハイビスカス明けつ放しの家ばかり　富士見市　阿部　泰夫

初盆や後悔の一つやふたつ　山口県　佐々岡美保子

小澤 實 選

靴下が畳に滑る夏座敷　甲府市　村田　一広

【評】こどもの頃、このような体験をしたような記憶がある。夏座敷はこどもがみだりに立ち入るべき場所ではなかったのかも。たまに入ると、靴下が滑ったりするのだ。

廃駅の駅舎を描く子夏休み　草加市　伊藤　一男

【評】もっと他に描くべきものはないのかと言いたくもなるが、あえて「廃駅の駅舎」を描いているのだ。

弱りゆく国を見据えているようだ。正座して削る鉛筆涼新た　吹田市　翠簾屋信子

【評】正座して鉛筆を削ると、たしかに涼しい。機械などを使うのではなく、ナイフで。文房具、ひいては書くという行為への敬意も感じる。

七夕の竹流れ着く船着場　日立市　菊池二三夫

氷買う縄で縛って一貫目　千葉市　三好　康雄

冷房を避けて猫寝る所定位置　桐生市　中村　正人

タンカーの頭上星飛ぶインド洋　東京都　東　賢三郎

夜の秋や陶器の豚の貯金箱　伊勢市　藤田ゆきまち

金山寺みそに採れたてきゅうりかな　川口市　蓮田　陽子

雲の峰キャッチボールの音高し　藤沢市　原島　幸子

俳句あれこれ　堀田季何（俳人・歌人）

高校生の息吹

俳句甲子園は、すでに26回目。多くの人々に支えられ、持続可能なイベントになりつつある。疫禍の危機さえも乗り越えた。

そんな俳句甲子園だからこそ、高校生の一生の思い出になり、審査員も卒業生もスタッフもスポンサーも観衆もそれぞれの感動を語り継ぐ。何を隠そう、審査委員長の私も、大会中はもらい涙で何度も泣き、大会後は余韻とロスに浸っているのだ。

俳句甲子園の素敵な点の一つは、団体に加えて、個人の表彰も行っていることである。最優秀賞、優秀賞、入選に輝いた句のどれにも、現代に生きている作者たちの息吹が感じられる。

例えば、こんな作品だ。

生家てふ市営アパート星月夜　田邊広大

道徳の授業を蠅の飛びまはる　小幡曜

入道雲ロックンロール聞き飽きて　鎌田琉夏

不登校やめられそうなほど朝焼　武井佳奈

題字デザイン・イラスト　福田美蘭